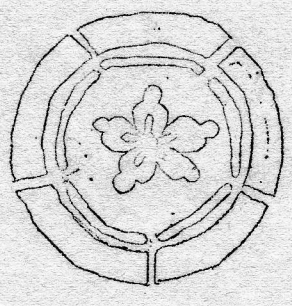
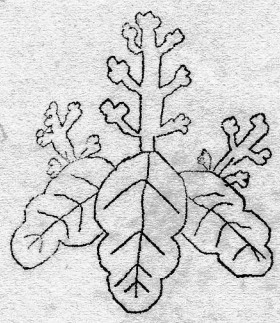
新入生歓迎行事

桶狭間の合戦めぐり

SCHEDULE

4月30日　案内資料配布
5月2日　学習及び打ち合わせ会
5月3日　現地踏査
5月7日　反省会

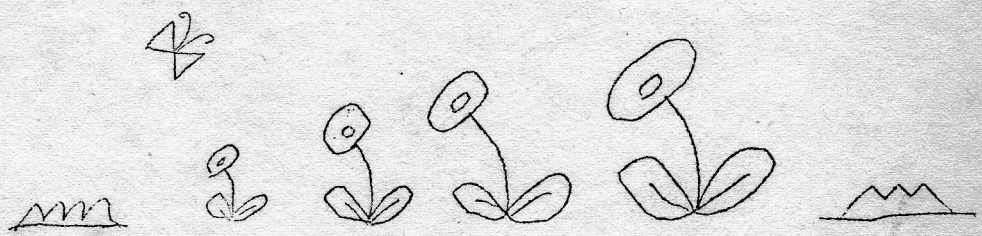




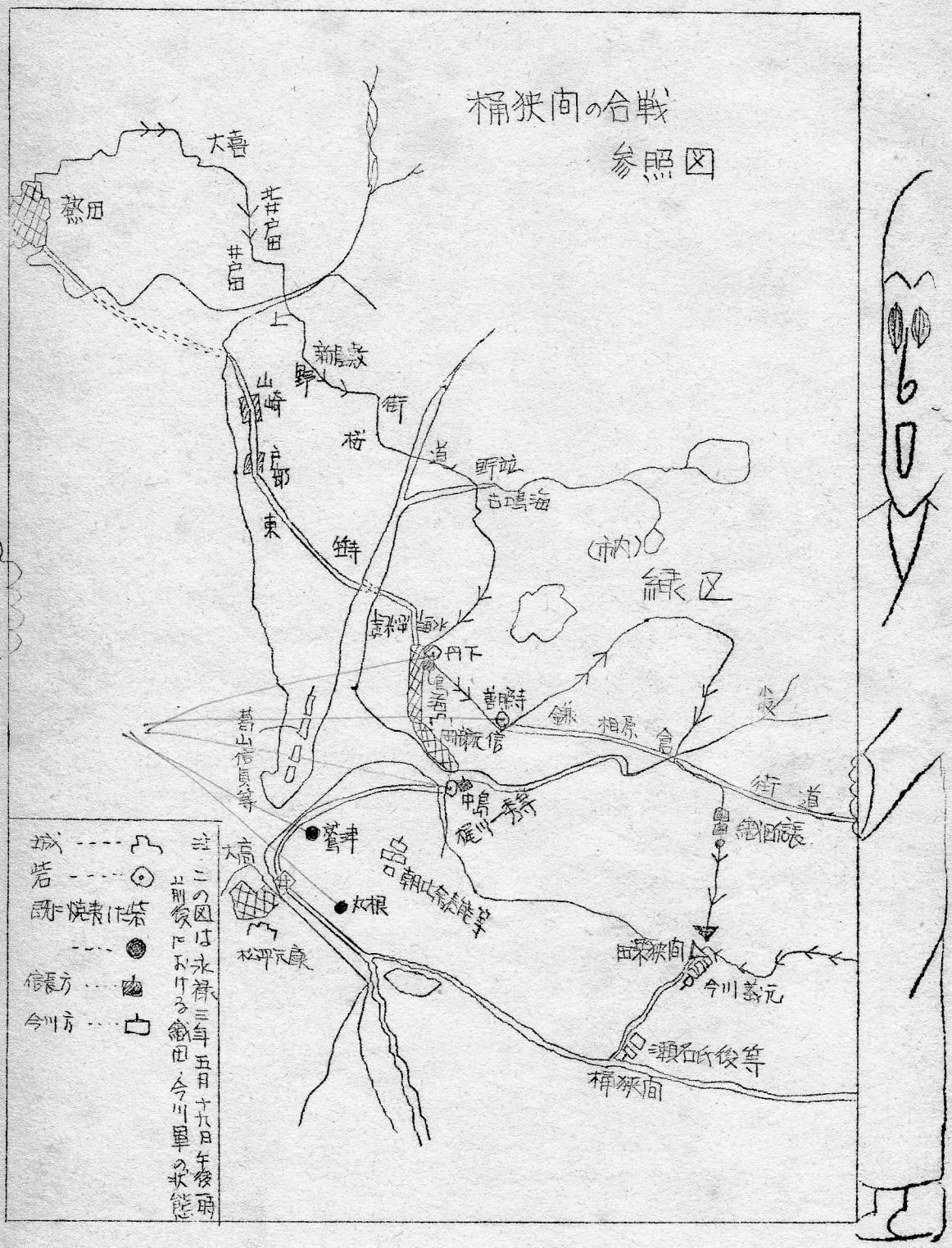
名大郷土研究会

新一年生が希望に燃えて名大の門(?)を往き来するようになってから早や一ヶ月近く経さ学内には新鮮な空気がみなぎっています。私達は大学へ何を求めて来たのでしょうか。大学は学術の教育、研究の場でありますが一方、民族地域文化の保護育成の場である事は教育基本法の解釈を待つまでもありません。わが郷土研究会は文化の創造とまで行かなくても身近にありながら未知の物を最も学生にふさわしい手段で実践的に把握し合わせて現代人にありがちな精神的・地理的故郷喪失感を打破していくという趣旨でやって行こうとしております。この様なサークルの内容を新入生に知ってもらい、あわ良くば永遠に本会有為な人材になってもらおうと昨年度に続き再び桶狭間合戦の跡を訪れる事にしました。既に御存知の様に永禄3年(1560年)5月19日、織田信長がわずかの手勢で田楽狭間に於て今川義元の大軍を奇襲しこれを打ち破った事はあまりにも有名であります。我々はあくまでも史実に忠実に熱田神宮から合戦場跡まで途中の城砦跡を見て回りながら信長の進撃コースを徒歩でたどりたいと思います。出来るだけ貪欲に調べ、見、そして聞いて今回の行事を実のあるものにしましょう。一般的な概念資料としてこの抄を作りました。

(片　山)



桶狭間の合戦 参照図


大喜
熱田
井宮
井戸田
上
新鶴
野
街
桜
道
山崎
戸部
東
鳴海
(市内)
緑区
丹下
善照寺
鎌
相原
倉
街道
善山信長等
中島
信長
義元
織田信長
善津
大高
知根
松平元康
桶狭間
今川義元
瀬名氏俊等
桶狭間
城
砦
既に焼棄した砦
信長方
今川方
注 この図は永禄三年五月十九日午後一時
桶狭間における織田・今川軍の状態

織田・今川両家の沿革

織田家はもとは足利幕府の管領斯波家に仕えてた。斯波家は越前尾張を所領としてた。信長より九代前の常勝の時はじめてその老臣に加わった。しかし曾祖父敏定の頃になると斯波家の勢力が弱まり敏定が尾張の政治を自由にするようになった。敏定の孫にあたる信秀(信長の父)が、その勢力範囲を広めた。

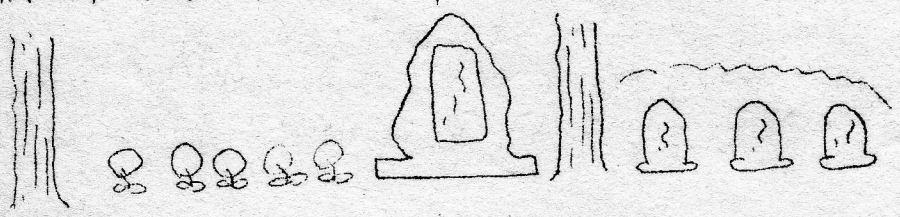
今川家は足利家と血を同じくし義元より十代前の吉良国氏が三河国幡豆郡今川荘を領したにはじまる。国氏の子の代から駿河を領する様になり、範国の子二代貞世(範国)は遠江の守護となった。範国より六代たって義忠が入京し幕府を護った。その際幕府の命令によって遠江の乱を平定その帰途に義忠は殺された。義忠の孫が義元である。

織田の尾張と今川の駿河との間には遠江三河の二州がある。この二州の事情が大変両家の関係に影響を与えていた。まず遠江は今川仲秋が領していたが彼が早世して後遠江の諸城主は今川家と織田家に属する事になった。しかし氏親(義元の父)の時に遠江の織田方の諸城は攻撃をうけ今川方となった。一方三河は最初吉良長氏・義継兄弟が領していた。この両家は常に主導権を争っていたが勢威がふるわず三河の諸城主は今川方につこうとした。そこで今川は自分の物としてしまおうとしたが、これに逆ったのが松平長親である。今川氏親は松平氏を攻めたが(家康の五代前)支配出来なかった。つまり尾張と駿河の間に一敵国が出来た※

※のである。しかし年がたち松平広忠(家康の父)の時になり彼が早死にをしたため竹千代が今川に人質となるに及び三河の大半も今川に服属することになった。そしてそれと同じ年織田信秀が没った。だが松平家と異なり信長がすでに成人していたので今川には服しなかった。そうして義元がすこしずつ織田家の領土に侵略し始めるにおよび、いよいよ両家の戦いの時は熟するのである。それはあたかも時永禄三年五月の事であった。

両軍の兵力

兵数については文献等で一定せぬが知る手段が無いわけではない。則ち領土からその兵数を推定するのである。織田家の場合の領土は尾張であるが全部ではなかった。本当の意味の織田領は尾張の半分もたっていなかった。則ち四十三.四万石の五分の二とすると約十六.七万石となる。当時は一万石につき二百五十人の出兵能力があるとされているから織田家は四千人内外の兵力を持っていたことになる。しかし兵数の比較では今川とは戦うべくもなかっただろうが一方軍紀や訓練がすぐれていた。今川家の場合は合計約七十八万石となる。これに尾張の今川領も入れると百万石以上となるだろう。そうすると兵数は二万五千人という事になる。だが名族の今川家は驕奢に流れてつい柔弱になるきらいがあったのである。則ち彼今川義元は公卿を真似て額髪を剃らず歯を黒く染めていたという事である。



戦いの経過

永禄三年(1560)

五月一日　出兵命令を義元は麾下の武将に出す。

十日　先兵出発

十一日　義元、府中を出発　本軍宿営地　十二日 藤枝　十三日 掛川　十四日 引馬(浜松)　十五日 吉田　十六日 岡崎

十五日　先兵 池鯉鮒に至る。

十七日　〃　岡崎着

十六日　義元岡崎着

十七日　〃　岡崎、緒川、刈屋の兵の部署決定　庵原元景ら　堀越義久ら

十八日　義元、中頭、今村を経て沓掛着、ここで翌日の軍隊区分決定

丸根　松平元康(2500)

鷲津　朝比奈泰能ら(2000)

援兵　三浦備後守ら(3000)

清洲方面前進兵　葛山信貞ら(5000)

本軍　今川義元(15000)

鳴海城守兵　岡部元信(7,800か?)

沓掛　〃　浅井政敏(1500か?)

他に大高城の鵜殿長照にも丸根、鷲津城攻撃に加わる様指令

※織田方の守りは、

鷲津砦　織田信平(400?)

丸根〃　佐久間盛重(700ないし400?)

丹下〃　水野忠光ら(?)

善照寺〃　佐久間信辰(?)

中島〃　梶川一秀ら(?)

30騎程

はお十八日、信長は佐久間より「義元が、十八日、沓掛に着き、十九日丸根、鷲津を攻める」を報告さる。

十九日　※日の出. 午前4:27

未明　元康、丸根を攻撃 ——→佐久間盛重に対して.
丸根陥落後義元に報告、休憩の為大高城へ向かう。
朝比奈、鷲津を攻撃 ——→織田信平らに対して
織田方敗れ、一部清洲へ敗走
（午前十時頃か）

午前二時頃か. 信長進軍を命令.
空白みはじめる頃、馬で城外へ出る.（岩室重休以下数騎）
午前八時　熱田（200騎）

- 熱田神宮参拝（部下を待つ意あったらしい）（兵1100）
- 上知我麻神の前り辺で鷲津、丸根の黒煙を見る（陥落を知る）
- 井戸田
- 山崎…佐久間盛重死亡の報を受ける。
  丹下善照寺の間で佐久政次、千秋季忠ら（300）鳴海方面へ向かう。
- 善照寺…この頃兵（3000）、又、ここで政次らの戦死を聞く。政次らを討った敵を追おうとしたが、林・池田・柴田らに諫められた。
- ◎沓掛方面から梁田政綱の間者から報告を受ける。「義元は大高城へ向かって桶狭間に休息中」「義元は、田楽狭間に駐屯した」
  政綱の進言を入れて、二千人程度の部下をつれ丘陵地帯に姿を隠して、義元の陣へ向かう。

ところで義元は沓掛から大高へ向かう途中で丸根鷲津の勝利を聞き、さいさきよしとして田楽狭間に休息していた。

田楽狭間で佐々政次らの首級を見て有頂点となる。近くの神官、僧侶らが酒肴を持ってきたので酒盛りとなり警備ゆるむ。

正午前後から雨風吹き荒れる。(織田方より今川方へ向かって)午後二時頃やゝ雨足弱まる。織田方は太子ヶ根(大桶ヶ根)を駆け下り、真直に敵営をつく。

桑原甚内が義元をみつけるも斬られ、服部小平太が槍で義元の脇腹を刺すも逆に槍柄をそして又膝頭を斬られる。毛利新助が義元をねじふせ左手で頭をおさえたら人差指をかみ切られた。しかし右手で義元の首を刺した。

信長は今川方を追わず間米山に兵を集め、義元の首級の実検をし、引きあげる。時は午後四時頃。もときた道をもどる。熱田神宮により、日が暮れてから清洲城へ入った。

12年度

名古屋大学郷土研究会会員名簿

1年	教育学部	鈴木 弘	昭和区伊勝町1の46	佐久間方
	経済 〃	保坂英雄	中区西川端町9の22	
	〃	松山 博	昭和区丸屋町5の64	
3年	法 〃	片山勝治	海部郡甚目寺町西今宿光和刷子	
	工 〃	津坂峯隆	南区四条町4の4 (691)1968	☎ 4118 (服部方)

→常滑市久米字荒子47 (0560) 内田部屋

教養部

L 2・34	山岸 章	昭和区宮東町349の1	小林方
L 2・34	鈴木克祝	昭和区南分町4の54	川口方
S 2・34	樋口清司	四日市々大字富田一色999の6	

→石川県石川郡鶴来町月橋ル8

新入会員

S 2・32	✓西村敏昭	西区庄内通2の20	武馬方
L 1・11	✓杉戸清彬	中村区松原町4丁目5番地	
L 1・12	✓河合研次	豊橋市中柴町109番地	
L 1・12	✓石井政一	大垣市室町	
L 1・12	✓加藤正	豊川市国府町	
L 1・32	✓高田昌彦	東区矢田町3の10	
L 1・14	○加藤鉦治	中川区富田町新家142	

作

※ 会長 片山勝治
会計 樋口清司
渉外 山岸 章
記録 津坂峯隆
鈴木克祝

→石川県羽咋市押水町 宿

○西川 港区港栄町7-57
○東浦 昭和区宮東町304の3 大橋方
○諸戸 四日市々富田一丁目8の3
○鈴木 四日市々大字茂福1808
○梶浦 〃 宮州原町8-12 四日市0593 65-0567

TEL. 751-5589
" 321-8518

" 731-7684

" 531-9350
" 471-5082
" 3-1727

" 711-9684

NO

桶狭間古戦場伝説地

愛知県豊明町大字栄字南館11番外二筆の内

桶狭間合戦は一瞬にして勝敗が決せられたが、歴史上の意義は大きい。
16世紀の戦国動乱のなかにあって駿遠三の三国に強大な勢力をもっていた今川義元は天下を統一しようと永禄3年(1560)5月大軍を率いて京都に向って進撃を始めた。これを迎え討つ織田信長は同年5月19日小勢をもって桶狭間で今川の本陣を急襲した。不意をつかれた今川勢は大敗し義元は討死した。その結果、織田信長の勢力は急激に拡大し、かれが後に天下を統一する政権を樹立したのもこの合戦の勝利がその跳躍台となったといえよう。
「所で義元敗死の地は、たしかな記録もなく古くから諸説がある。合戦には桶狭間の名が冠せられながら古戦場としては豊明村大字栄があげられている。明和8年(1771)にはその地の人々によって義元の墓碑がたてられ、明治7年山口正義らによって改めて建碑された。
昭和12年に文部省に申請して「伝説史跡」の指定を受けた。桶狭間では義元敗死の地といわれるのは田楽坪であると主張している。古くからの主張であって「桶狭間古戦場」「文化13年建」(1816)の標石を先年発見した。
ここに今川治郎太輔義元墓(裏面に碑文、明治9年山口正義等)があり、その東方に桶狭間弔古碑(文化6年 碑文秦鼎)があり五基の小塚がある。(士大将塚という)田楽坪は一帯小松原で百坪ばかりの空地が享保ころまで残っていたという。田楽坪はいつしか田楽狭と呼ばれるようになり後耕地となり拡張されてヒロツボと呼ばれている。」

附 戦人塚

豊明町大字前後仙人塚1737

桶狭間の東北、字前後の丘の上に戦人塚の石碑がある。碑西には「戦人塚」裏面には「永禄3年庚申五月」と刻んである。伝説によれば此戦役にて織田信長が敵軍の首2500有余を検らべその遺骸を集めて埋めた所であるという。

NO

鳴海城跡（根古屋城跡）

愛知県鳴海町字城丸根古屋

鳴海町のすぐ北方にある標高20mの丘が鳴海城跡で、西に星崎城、南に大高城と相対し東海道の要路である。応永年中（1394頃）安原宗範が築城し（鳴海神社がここにあったのを今の地に移して）永禄年中今川氏の臣岡部五郎兵衛長教が古城を修理していた。桶狭間合戦に織田信長は義元を破り更に鳴海城を攻め且和をすすめた。長教は和睦の真の為があるなら主義元の遺骸を送せといったので信長は僧を遣して送った。長教は駿府に帰り厚く葬った。城郭は東西二郭あって空堀が廻っている。東西135m南北61mばかり南は絶壁になり東西北三方に濠の址がある。城址の碑は東郭址に建っている（昭和18年）

善照寺砦址はその丘の東の端で標高25m東方からの防禦陣地である。東西43m南北30mに老松がある。織田信長が今川義元の攻撃に備えて築いたものと伝えている。

大高城跡

知多郡大高町字城山（町の後方）

大高城は永正（1504）の頃花井備中守が居城し天文弘治の頃には水野忠氏父子が居城した。水野氏は初今川氏に属していたが後織田氏に属した。時が永禄2年（1559）鳴海城主山口左馬介が織田氏に叛いてこの城と沓掛城とを捨ててて今川義元に属した。そこで織田信秀は鷲津丸根の砦をかまえて兵糧の道をたったため義元は松平元康に命じて兵糧を城中に送った。信長は鳴海近傍の砦を巡見して隊伍の整っているのに感心して帰られなかった。これが有名な大高兵粮入れである。桶狭間の戦には元康が守っていたが義元戦死をきいて三河に帰り廃城となる。元和二年（1616）志水忠宗が一万石を領して城址に宅を設け明治3年に至り廃した。

大高城跡は標高20mの丘にあり東西106m南北32m四方に二重の濠があった。現在は土居はなく外濠は大体敷地として残っている。蓬左文庫蔵大高村古城絵図に本丸、二の丸、三の丸、内堀外堀、土居などくわしい。本丸中央に大高城址碑がある。

NO.

附 鷲津砦址

知多郡大高町鷲津 大高停車場の東方長寿寺の後の丘

永禄2年(1559)織田信長が今川氏に対抗する為に丸根砦とともに築いた。大高丸根鷲津は三角形の位置にある。桶狭間の戦に陥る。標高35m南北69m東西40m(堀とも)とあるが境が明でない。

附 丸根砦址

知多郡大高町丸根 大高停車場の東南

鷲津砦の東南400m 大高城の東方800m 標高35mの地点にある。東西36m南北28m この外に巾3.6mの外堀がある。四周に堀の形を残している。

永禄3年(1560)佐久間盛重が守り松平元康の軍を迎え激戦した所。

昭和13年12月14日史跡指定